



平成26年3月10日
卓話 『レストランキャンティについて』

有限会社 春日商會 代表取締役社長

屋号:レストランキャンティ

川添 隆太郎 様



こんにちは。川添家で私は、食は文化なりと言われて育ちました。祖父の友人で、うちの元社長だった井上さんは、祖父はまさに地球人だつたと言っています。祖父は主にヨーロッパで国際交流をやった人です。1934年にフランスに留学し、学校に入ったものの、自分の求めているものとは違うということで早々に退学してしまったんですね。フランスでは写真家のロバート・キャパと出会い、祖父にとって人生が変わるほどの契機になったようです。1945年にキャパを日本に呼んだのですが、残念ながら日本滞在中に彼に連絡が入って第一次インドシナ戦争の取材に行き、ベトナムで亡くなってしまいました。

祖父は語学に堪能ということもあって高松宮親王の国際関係特別秘書官というような仕事をしておりました。国際交流にしても仕事なのかどうか分からぬような状態でいろんなことをやつた中に、実はキャンティの前身になるものがあります。当時、高輪の高松宮御用邸跡地にあった光輪閣という迎賓館で国賓などをもてなしていました。それが飲食業に触れるきっかけでした。

キャンティは1960年、麻布台で開店しました。1階にはブティックのベビードールが同時開店して、そこに梶子という、祖父と再婚した女性がありました。これもキャンティが一般のレストランとは違った楽しみ方ができる一つの要因にならんだと思います。梶子は陶芸の勉強でイタリアに留学し、イタリア人と結婚するんですが、祖父が歌舞伎の海外公演をしたときのナレーションを梶子がやったことで知りあいました。孫としては複雑ですが、それが祖父が私の実の祖母と

別れるきっかけになって、それがまたキャンティ誕生のきっかけになったようです。梶子はイタリア料理が上手で、祖父の友達が自宅に来たら全て手料理でもてなしていたんですが、ある時、梶子がもう勘弁してくれと音を上げたその頃、先ほどの光輪閣が閉められることになり、職人を何とかしなきゃということもあってキャンティを立ち上げたようです。祖父にとって飲食業は自宅の延長線、川添家のサロンとかリビングと言われました。

キャンティにはキャンティ族と言われる人たちがいました。大原麗子さんや小川知子さん、井上順さん、レーサーの福沢幸男さんなどなどです。面白いのは叔父がムッシュ一かまやつさんと親しくしていたんですが、父の葬式の時、気を使つたある人が彼を通した席が親族席で、親族としてお焼香いただいたっていうことがありました。本当にキャンティは常識とはまた一つ離れたところがあって、今までいうと多様性というんでしょうか、それを1960年から持ち続けた店だと思います。

祖父の言葉に「人間は何からも自由だが、世の中を生きていくためには何か力を持たないといけない。その際、絵や音楽の美は大きな力になる」という言葉があります。今後とも、食は文化なりをコアにしていきたいと思っております。ありがとうございました。

